

キタテハは北海道西南部から九州までごく普通に見られる種なのに、松波町周辺の身近ではきわめて珍しいチョウです。私は 2008 年11月12日、高砂市西畑4丁目の花畑を訪れたこのチョウに初めて高砂市内で出会い、2009 年の秋にも同じ花畑にやってきました。里山の自然が残る加古川市



志方町方面でなら比較的にみられる機会が増えますが、ヒメアカタテハほどには生息地でも個体数が多いはありません。松波町近辺でめったに見られない理由は、チョウの幼虫が食べて育つアサ科のカナムグラという植物がないからです。この植物は通常、

原野や路傍、河原などの荒地に、強靱なつたを絡み合わせて地肌一面を覆うようにはびこり、茎から葉柄にかけて鋭いトゲもあって、農家の人たちにとってはやっかいな刈り込みの対象となります。したがって、ヒメアカタテハが食べるヨモギとちがってチョウの食草としては決して多くないわけで、そんなキタテハが10月下旬から11月半ばに西畑で2年連続して観察できたのはまさにミステリーです。一体、どこで発生して花畑まで飛んできたのか、今のところ全くのナゾですが、あとで触れる、本来生息していない八重山諸島などでも稀に見つかることから、このチョウはかなり遠い距離を飛んで活動している可能性が考えられます。



キタテハにもキタキチョウなどで紹介した季節型があり、夏型と秋型の二つの変化がみられます。



9-10月に発生した秋型がチョウのまま冬を越し、越冬した母チョウが産んだ卵から発生するのが夏型です。加古川では5月頃から夏型が見られます。色がきれいなのは秋型で、夏型が淡白でやや黒ずんだ黄色であるのにくらべて、より濃い赤みを帯びた茶褐色となります。羽裏の地色も夏型が薄い黄色であるのに対し濃い褐色模様となり、後翅裏にみられる英語の「C」に似た模様がより鮮明となり見る角度によって金色に輝きます。信州や東北、北海道などの夏場涼しい地方には近縁種のシータテハというチョウ

がいて、近畿圏や中四国では標高の高い山地性のチョウとなるのですが、そのチョウの後翅裏面にも明確に英文字 C と読み取れる銀色の模様があり和名はずばりシータテハです。ではキタテハの C 文字は無視されたのかというと、実はラテン語からなる学名ではキタテハ：*Polygonia c-aureum* (金色のC)、シータテハ：*Polygonia c-album* (白いC) と微妙な色調を区別していて、キタテハの方が忠実に金色を反映させた格調高い命名になっているのが面白いですね。*Polygonia* はギリシア語の *Poly+gonia* = “多くの角のあるもの” という意味で、凹凸の多い羽の形を表現しています。ちなみに銀色文字が L と読める近縁のチョウもいて学名は *Nymphalis vau-album* で L との明記がありませんが和名をエルタテハとして L を反映させています。キタテハはシータテハよりは温暖な場所を好みますが、徳之島以南にはカナムグラがないため沖縄や八重山地方には定着していません。それなのに稀に西表島などの亜熱帯地域をキタテハが訪れた記録があり、それらが9月中下旬から10月であることから季節風に乗って移動したものと推測されますが、その活動範囲にはいぜんナゾが残る興味深いチョウです。



Aug.26,1967 京都市修学院
キタテハ 夏型



Nov.12,2008 高砂市西畑
キタテハ 秋型



裏面



Aug.22,2008 長野県
シータテハ



裏面